TUTUR PEREMPUAN：女たちの語り[1]

―彼女たちの語りが私たちの歴史になる場所

アユ・ラティ

インドネシアの女性史を語る上で、1965年後半に起こった国軍によるインドネシア史上最大の女性団体ゲルワニ（インドネシア女性運動）の壊滅という出来事を避けることはできない。スハルト将軍指揮下の国軍はゲルワニがインドネシア共産党（PKI）と共謀してスカルノ政権の転覆を謀ったとでっち上げた[2]。国軍はPKI、ゲルワニ、その他の左翼組織に関係するあらゆる者に対して大規模な襲撃を加えた。膨大な人間が殺害され100万人以上が投獄された。ゲルワニの女性たちには「不道徳」「野蛮」というレッテルが貼られ、恣意的な逮捕、投獄、強姦、そして殺害が行われた。組織は非合法化されメンバーたちの生活は踏みにじられた。ゲルワニの女性たちが裸で踊りながら拉致された６人の国軍将校の性器を切り落し目玉をえぐり剃刀でその体を切り裂いたという作り話が国家の宣伝によって広められた。社会と政治の場で女性の平等な権利を実現するために、20世紀初頭に開始された女性たちの闘いは、このゲルワニの悪魔化と1965年から66年の集団的暴力によって悲劇的な最期を迎えることとなった。スハルト将軍は新秩序体制を開始し、ゲルワニの歴史的起源である先進的な民族主義運動の理念を一貫して否定し続けた[3]。

スハルト軍事独裁下において「ゲルワニ」という言葉は、政治に熱中し国家に悲劇をもたらす理性を失った野蛮な女性たちというイメージに直結していた。スハルト政権は自らの支配に対するあらゆる政治的批判者を「潜在的な共産主義の脅威」あるいは「PKI」とみなしすべてを罵倒したが、同様にインドネシア人とくに女性の中には、政治的なことまた1965年にゲルワニが行ったと政府が繰り返し発表しているようなことに女性が関わってはいけない、という意識を植え付けられた。こうしてひとたび「PKI」とか「ゲルワニ」というレッテルを貼られた者には極刑を課してもかまわないという社会状況が作られた。一方、生き残った被害者たちは沈黙を強いられた。多くの者は1970年代の終わりになるまで拘置所、刑務所あるいは強制労働所に幽閉されていた[4]。釈放されると今度はそれまで刑務所の外で女性たちが1965年以来ずっと耐えてきた苦しみが彼女たちを襲った。当局の厳しい監視、恐怖心からの社会的迫害、絶え間ない国家宣伝によって自分のなかに植えつけられる「罪を犯した」という意識である。膨大な女性たちに対して迫害が行われたにも関わらず、それが公に議論されることはなかった。それを知るにはわずかに研究者や活動家の間に出まわっていた海外の文献に頼るしかなかった。1980年代インドネシアの女性たちの間でフェミニズムが話題になり始めると、多くのフェ

---

[1] Tutur Perempuanに直接該当する英語の訳語はない。おおよそでいうなら「women's storytelling（女たちの語り）」。「tutur」はもともとジャワ語で「utterance（発話・発声）」と「storytelling（物語を話すこと）」の間あたりに位置する単語である。

[2] 1965年のクーデター事件に関する文献については、本号掲載の文献目録を参照。

[3] サスキア・E・ウェリンガ はその著書においてゲルワニとインドネシア女性運動の歴史についてもっとも詳細な検証を提示している。*Sexual Politics in Indonesia*, New York: Palgrave MacMillan, 2002.

[4] 女性政治囚の経験に関する記録については本号掲載の文献目録を参照。

ミニスト活動家たちがゲルワニが女性運動のなかで果たした地平を再発見し、その悲劇的な終焉についての研究をおこない、かつての指導者たちとの対話も開始された[5]。だが、これらのフェミニストたちは隠された真実を明らかにし新秩序体制によって捏造されたゲルワニのフィクションに立ち向かうという断固とした態度をとったわけではなかった。

1998年初頭の経済的、政治的危機はスハルト政権の基盤を確実に侵食した。これにより女性が政治に参加することは災禍である、という神話に女性運動が立ち向かっていく空間が生まれた。スハルト政権史上はじめて、かつてのゲルワニメンバーを含めたすべての女性が一致団結し独裁者に立ち向かうという大衆的な抵抗運動が現れた[6]。そして一方では、インドネシア女性史のなかに予想外の衝撃をはしらせる襲撃が発生した。ジャカルタ、ソロ、スラバヤの100人以上の中国系女性に対する強姦事件すなわち1998年の5月レイプ事件である[7]。

事態が皮肉なかたちで展開するなかスハルト政権は崩壊した。悲劇によって女性運動の結束は強まり、新たに登場した改革派の政府に対して強い影響を持つようになった。女性に対する暴力ははじめて社会的問題、国家的課題として扱われるようになった。この運動によって政府は5月レイプ事件に対する自らの責任を認め、民間団体と協力してふたつの半官半民組織を設立することに同意した。共同真相調査チーム（TGPF）と女性に対する暴力防止のための国家委員会[8]である。

1998年から99年にかけて女性運動は力強く前進し、政府に対して5月レイプ事件の責任を追及した。改革と開放を求める世論の全般的な要求にも後押しされて、女性活動家たちは政府が自ら犯しながらも長年の間隠されてきた女性に対する憎むべき暴力の真相を明らかにする活動を開始した。そこにはゲルワニ[9]に対する弾圧も含まれる。サスキア・ウェリンガ（Saskia Wieringa）のゲルワニに関する画期的な研究ははじめオランダで発表されていたが、これがインドネシア語に翻訳され出版された。

---

[5] この時期、ジョグジャカルタとジャカルタを中心にして左翼学生活動家たちが元政治囚との接触を開始した。また女性活動家のなかにはサスキア・ウェリンガがインドネシアで秘密裏に調査を行った際に、また彼女たちがハーグにあるthe Institute of Social Studies (ISS)に留学した際にゲルワニについて知った者もいた。

[6] 1998年2月、女性活動家と知識人女性たちはミルク代の値上がりに抗議するデモを組織した。巧妙に「*Suara Ibu Peduli*, SIP（憂慮する母親の声）」と名づけられたこの行動は、それまで政治行動に参加したことのなかった主婦層から広範な支持を集めた。この主婦層がのちにスハルト政権の打倒へと向かう激しい学生デモに物資等の支援を送ることになる。もとゲルワニのメンバーのなかには女性団体が設立した共同炊事所や生協活動に熱心に参加したものもいる。主婦運動についてはAyu Ratih, "When Mothers Became Activists: The Voice of Concerned Mothers (SIP)", *Latitudes Magazine*, April 2002.

[7] 1998年5月13日から14日にジャカルタで起こった暴動のなかで大規模な強姦事件が発生した。事件を調査するためにいくつかの人権団体によって独立した真相調査団として*Tim Relawan untuk Kemanusiaan*,TRuK（人道のためのボランティア・チーム）が創られ、また特にレイプ事件を調査するために特別女性班が編成された。5月レイプ事件の詳細に関してはTim Relawan untuk Kemanusiaan, *Sujud di Hadapan Korban*, Jakarta, 1998 及びKomnas Perempuan, *Disangkal:Tragedi Mei dalam Perjalanan Bangsa*, Jakarta, 2002.

[8] ハビビ大統領は事件に対する政府の責任を公式に認め、被害者に謝罪を行った。これはインドネシア史上はじめて女性に対する暴力が国家的問題として認められた事件である。1949年独立以降、インドネシアのすべての政権は従軍慰安婦問題をすら取り上げてこなかった。

[9] 5月レイプ事件の発覚に続いて、アチェでの国軍による反乱鎮圧作戦下での女性に対する暴力が明らかとなった。1998年7月下旬、下院によって組織された真相調査チーム（TPF DPR-RI）のメンバーがアチェに赴いた際、人権活動家の付き添いのもとで寡婦および性暴力の被害者が証言を行っている。NGOなどによれば1990年から1998年の間に100人から600人の女性が性的暴力を受けた。真相調査チームの記録については*The Straits Times*, July 29, 1998. 女性への暴力防止のための国家委員会も政府に対し、国連の女性に対する暴力に関する特別報告者Radhika Coomaraswamyを招請するように要求している。彼女が第55回人権委員会に提出した報告については*Integration Of The Human Rights Of Women And The Gender Perspective: Violence Against Women, Report of the Special Rapporteur on Violence against Women, Its Causes and Consequences.*

彼女の著書はいかにして国軍がゲルワニの「性的不道徳」という神話を作り出し、女性運動と左翼勢力に対する攻撃を正当化する根拠とされたかを明らかにしている[10]。

全インドネシア女性会議開催70周年を記念して開かれた全国女性会議のなかで、ゲルワニで最後の事務局長を務めたイブ・スラミ・ジョジョプラウィロ（Ibu Sulami Djojoprawiro）は1965年から66年にかけてのレッドパージによって彼女の組織を含め膨大な被害者たちが経験した悲劇と苦闘について語るという貴重な機会を与えられた。だが、この一見すると束縛をとかれたように見える歴史的な政治改革の歩みのなかでも、かつてスハルト政権の頑強な基盤であったもの、つまり「共産主義者」と烙印を押されたあらゆるものに対する根深い敵意が頭をもたげたのである。イブ・スラミはこの全国女性会議で最初の発言者という名誉ある地位を与えられることになっていたのだが、これに対して出席した著名な女性グループの代表らから即座に激しい批判があげられた。彼女たちは会議主催者が共産主義を復活させようとしているとして非難した。多くのインドネシア人と同様に彼女たちもまた1965年から66年の事件に関して国家が作り出した神話を信じてしまっているのだ。ゲルワニの悪魔化は被害者に同情することを阻止し、また既成の観念をより批判的に検証することを妨げるに十分な威力を持っているのである[11]。

ゲルワニのメンバーが「共産主義者としての活動を再開するために」[12]女性団体を利用しているという疑いは、ポスト・スハルト期の女性運動全体に影響を与えていた。1965年事件について徹底した調査を行えという声が人権にかかわる様々な社会運動全体の要求として浮上しつつあったのに、女性運動はこの声に加わらず、この事件をより深く理解するためにジェンダー的視点を提起するということもなかった。また奇妙なことにイブ・スラミが実際に被害者たちの先頭にたって運動をしていたのにもかかわらず、それが彼女の周りにいる男性の仲間たちの威光をさえぎることになってしまうということで、女性たちの経験は語られないままになっていた[13]。被害者と活動家、また知識人とくに歴史家たちの間で歴史の真実を明らかにし、歴史認識を再構築するためにどのような公的な取り組みが必要かといった議論がなされるときにも、女性の経験の重要性が考慮に入れられることはほとんどなく、また被害女性が証言する場が持たれることもなかった。つまり歴史に関する問題を議論することに対して女性運動の内部から起こる抵抗、そして人権運動のなかでの被害女性に対する意識の欠如、この両者によって被害女性たちは自らの苦しみを語り正義を実現するために声をあげることを、非常に限られた社会的空間においてしか行えなかったのである。

---

10 ウェリンガはオランダでその論文が発表されるとインドネシアへの入国を禁止された。オランダ在住の元政治囚ヘルスリ・セティアワン（Hersri Setiawan）が中心となって彼女の論文の翻訳が進められたが、スハルト政権崩壊後になってやっと著名なフェミニスト団体Kalyanamitraによって出版された。

11 ウェリンガはこの会議にメイン・スピーカーの一人として出席していた。それはイブ・スラミの証言に対して学術的な裏づけを与える機会であった。この会議の様子についてはCarla Bianpoen, "Dynamic Plurality Marks First Women's Congress in Post-Suharto Era", *The Indonesian Observer*, December 22, 1998; Helene van Klinken, "Coming Out", *The Guardian*, July 14, 1999; "Women's Congress", *Inside Indonesia*, Vol. 58, April-June 1999. ウェリンガはこの会議での保守的女性たちの憤怒に対して次の文章のなかで興味深い分析を加えている。"Reformasi, Sexuality and Communism in Indonesia", Paper prepared for first conference on Sexuality and Human Rights, Manchester, July 1999.

12 これは政府系女性団体Kowaniの議長イネ・スカルノ（Ine Sukarno）の言葉である。前掲Wieringa, p. 1. からの引用。

13 イブ・スラミは数人の元政治囚とともに*Yayasan Penelitian Korban Pembunuhan Massal*, YPKP 1965（1965年大虐殺被害調査基金）を設立した。これは1965年事件に関する最初の被害者団体である。右翼民兵からの執拗な嫌がらせのなかになりながら、彼女は真相調査を行い、ジャワの大量埋葬地を発掘し、国内外で公式にスハルトの犯罪について発言した。2002年10月9日の彼女の突然の死は、1965年事件の被害者運動にとって重大な損失である。

女性の声の不在。このことが私とインドネシア社会史協会そして人権NGOで活動していた仲間たちが被害女性に個人的に接近していった理由であり、彼女たちは自らの経験を語るべきだということに気づいた理由だった。はじめ2000年に私たちは1965年事件に関するオーラル・ヒストリー・プロジェクトとして彼女たちの語りを記録する目的で彼女たちとの接触を始めた[14]。取り組みを始める前には多くの人たちから注意を受けた。被害女性たちは深いトラウマを負っていて、見ず知らずのものには経験を語りたがらないだろうというのである。だが取り組みをはじめてまもなく私たちはこうした見解が必ずしも正しくないということを知った。私ははじめて月例の寡婦たちの集まりに行ったときのことを鮮明に覚えている。それは元政治囚の家で開かれ、私が自分が来た目的を説明すると、まだ話が終わらないうちに何人かの女性たちが自分の経験を話しはじめたのである[15]。忘れられないのはかつてゲルワニの国会議員だったイブ・カルティナ・クルディ（Ibu Kartinah Kurdi）が私の自己紹介に対して言った言葉である。「私みたいな人間が裸で踊って将軍のペニスを剃刀で切り落とすなんてできるとおもうかい」私は彼女があまりに率直に話すので、のけぞってしまった。私が何か言葉を返そうと思っていると、その前に彼女が自分の経験を語りはじめていた。しかもとても平然と。そしてその話に対して他の女性たちも口をはさんで応答し、語りは途切れることなく続いたのである。

このはじめての会合とその後の集まりのなかで私は、安心できる環境があり信用できる人が相手なら女性たちは自らの経験を恐れずに話すことができるということを知った。なかには泊まっていって自分の半生を聞いてくれという人もいた[16]。この被害者たちは言語を絶する暴力と屈辱に耐えてきたのであり、語ることで蘇るその記憶の痛みを抑えることができるかどうかわからないという不安から、実際これまで聞き取りされることを拒みつづけてきた人たちである。また自らの経験を聞いて欲しいと望みつつも、録音されることを拒否する人もいた。加害者からの報復や家族とくに子どもに嫌がられることを恐れてである。だが全体としてみればこれらの集まりは、自分たちが「追放された者」の輪の外にいる人とつながれた、という喜びに満ちていた。またそれは自分が見てきた歴史を語ることができるという喜び、そしてそれを若い世代の人に語ることができるという喜びでもあった。そこには数十年にわたる国家のプロパガンダも自分たちが恐れていたほどには強力なものではなかった、と知ったことへの喜びも含まれていたのかもしれない。波のように打ち寄せる懐かしい思い出と苦痛に満ちた断絶の語りを聞く中で、私たちに何度も投げかけられた意味深い言葉がある。「もうわかったでしょう。私たちは売春婦じゃない。私たちの話はもうあなたたち、若い世代に託したよ。最後には本当のことが明らかになるように」

自分たちのライフ・ヒストリーを共有して欲しいという強い希望、また自分たちの人間性を認めて欲しいという強い気持ちは、歴史家として仕事をしなければならない私たちの心をかき乱した。そし

---

[14] 2000年はじめにジョン・ルーサと著者は1965年事件の被害者に対する集団的なオーラル・ヒストリー調査を行った。この調査グループのメンバーとともに2003年、*Institut Sejarah Sosial Indonesia*, ISSI（インドネシア社会史協会）が設立された。その成果はJohn Roosa, Ayu Ratih, and Hilmar Farid (eds.), *Tahun Yang Tak Pernah Berakhir*, Jakarta: ISSI, Elsam dan TRuK, 2004. 日本語訳は近日中に発行される予定。

[15] ジャカルタの元政治囚の妻や寡婦は自宅で定期的な会合をもっている。これは夫や同志が投獄されてからはじまった。1970年代後半に政治囚が釈放されてからも、会合は続けられた。これは被害者の家族にとって極限的な弾圧のなかで直面する様々な困難、とくに福祉的な問題を乗り越えるための一つの生存のためのシステムである。

[16] 私たちのグループの男性メンバーのなかにもランプン、中部ジャワ、東カリマンタンでの調査中、同じような経験をしたものがあった。男性被害者と同席している会合では黙っていた被害女性が、こっそり近づいてきて個人的に聞き取りをしてほしいという。拘置所で兵士から繰り返しレイプされたという話をしながら女性は泣き崩れた。多くの被害女性は私たちを信頼できる子どものような存在として、またそのジェンダーにかかわらず自分の苦しみを理解してくれる者としてみている。

て私たちは社会史協会の音声アーカイヴに収蔵するために聞き取りを行うということとは別に、女性たちが安心を感じることのできる社会的な空間を広げるための取り組みが必要だと考えるようになった。それは自らの痛み、苦しみを語るためだけではなく、彼女たち自身が社会のよき一員であろう、役に立とうと努力するなかで尊厳を回復していくそのような空間を意味する。2001年10月、数人の被害女性と協力して私たちはジャカルタで小さな集まりを開催した。そこでは様々な人権侵害を経験した被害女性や支援者があつまり、お互いの経験をシェアしあった。25人ほどの女性が参加し司会は私たちの仲間の一人がおこなった。3時間にわたる集まりでは互いの語りのなかで胸が張り裂けるような気持ちを共有しただけではなく、女性たちの間に友情も生まれた。被害者たちがはじめて人前に立ち必死に自分の経験を語るとき、参加者たちは一瞬の沈黙に包まれる。そして他の被害者が慰めの言葉や自分自身の経験を語り、その悲しみを和らげようとする。参加者たちの顔には不信や疑問の表情も見られたが質問は多くはあげられなかった。そこにはまるで今は議論のときではなく、経験を語り耳を傾けるときなのだという沈黙の合意があるかのようだった。この集会が終わるころには会場全体がこういう集まりを定期的に持ちたいという気持ちに包まれていた。そして高齢の被害女性を中心に参加者みんなで民族独立闘争の時代の歌を歌った。

語りと傾聴というプロセスを通して被害者たちが自らの苦しみの歴史的原因を見つけ、暴力の加害者によって植え込まれた嘘と歪曲に立ち向かう言語を獲得できるようにとの期待をこめて、私たちはこの集まりを「*Tutur Perempuan*（女たちの語り）」と名づけた。被害者のなかには深いトラウマのために語ることさえ困難な人がいることを私たちは知っていたが、それでもこの集まりを心理的な問題を解決するためのピア・カウンセリングを行う「医療的な場」にしようとは考えなかった。その場の力点はつねに、ともに抑圧の構造を知り、被害者の間にシスターフッドを築くということに置かれた。このシンプルな枠組みに立った上で、しかし実際にそれを実現するのはとても難しい。この取り組みのなかで私たちは、たとえ他の暴力の被害者や参加者が1965年の被害女性たちに強い共感を示したとしても、その人たちにとってゲルワニの経験と自分の経験を重ね合わせることは簡単ではないということに気が付いた。その人たちにとってみれば1965年の女性たちのケースは女性に対する人権侵害の一つのケースとしては理解できても、ゲルワニの壊滅がスハルト軍事独裁体制の建設と永続化のなかで中心的な意味を持っていたということは理解できないのだ。また逆から見れば、1965年の被害女性たちは自分の過去の政治経験を語ることを自制する傾向があった。彼女たちは「共産主義的」な思想を振りまいているといって非難されることを恐れるあまり、自らを純粋な被害者として表現し、他の女性から非難されないように、完全な同情を得るようにと振舞うのである。スハルト体制がいかに歴史的に女性の意識を破壊し、彼女たちの政治や人間性に対する感性を引き裂いたかを私たちはこうした経験を通して知った。それでも一時的で小規模ではあるけれど、この開かれた場が共感と連帯によって守られていることに私たちにはささやかな喜びを感じた。

オーラル・ヒストリーの調査に専念していたために、第一回目の*Tutur Perempuan*のフォローアップが行われたのは開催から3年後、1965年事件39周年の時である。このときは約100人の女性がジャカルタでの会合に参加した。全参加者のなかで1965年事件の被害者がもっとも大きなグループだった。この第二回目の*Tutur Perempuan*はある意味では第一回よりもかなり政治的なものとなった。女性たちは苦しかった経験を語るだけではなく、自分がいかに不正義と闘ってきたのかをも語ったのである[17]。真実をより多くの人に語り、正義を回復するために社会的な取り組みをどう進めていくべきか。被害

[17] この会合に参加したのはアチェの女性活動家、5月事件で子どもを亡くした母親、子どもが行方不明となった母親、移民労働者、DV問題に取り組む活動家。この女性たちはそれぞれの課題において人権を推進するために最前線で活動している。

女性たちがそうした議論をしたがっていることが鮮明になった。女性が声を上げ国家の責任を追及することが必要だと明言する他の女性たちや活動家たちとともに過ごすことを通して、1965年事件の被害女性たちのなかに被害者として、また市民としての自尊心が芽生えてきたといえるだろう。参加者たちの熱意に押されながら、私たちはこの様々な経験をもった女性たちの集まりをさらに拡大していくべきだと感じた。また一方で1965年の被害女性たちが独自の場をもってその経験を共有し、正義を求めるための運動をすすめていくことが非常に重要になっていると感じた。大規模な集まりは被害者が自尊心を増していくためには一定の意味があるが、抑圧がうまれる構造をより深く理解し、正義を実現するための要求をまとめていくには適切ではない。

私たちがこうした取り組みを行っている一方で、政府は真実和解委員会の設立計画を発表し、これに対して人権活動家、歴史家、また男性を中心とする1965年の被害者たちの間で議論が高まっていた[18]。だがこの議論のなかで被害女性たちは周縁化され、男性たちからは簡略化された情報しか与えられなかった。私たちはますます女性たちが*Tutur Perempuan*を活用して自分たちの見解をまとめ、主要な要求を提示するとともにそれをこの議論の重要な論点として提起するべきだと確信するようになった。またジャカルタの外に住む女性たちへの聞き取りの経験から、他の都市でも同様の集まりを持つことが必要だと感じた。私たちがジャカルタであった被害女性たちはほとんどがゲルワニのリーダーかあるいは1965年以前に著名な活動家、政治家だった人物の妻たちだった。彼女たちすべてが被害者団体で積極的に活動していたわけではないが、首都に住んでいてまたかつては社会的地位を持った人々であるがゆえに彼女たちは現在の政治問題にも敏感だった。

2005年を通して私たちはいくつかの被害者団体、人権団体と協力し、ジャカルタ、ソロ（中部ジャワ）、アルゴサリ（東カリマンタン）、そしてギアニャール（バリ）で5回の*Tutur Perempuan*を開いた。最後におこなったソロでの集まり以外は、会合の性格に関して当初のシンプルな基本理念を貫いた。参加した女性たちは半円になって座り、順番にそれぞれの経験を語る。ファシリテーターは事実関係を確認するためにだけ質問をする。これまでと同様、はじめにそれぞれの証言が行われた後、対話は次第に発展し過去の様々な社会運動や政治団体の内外での活動のことや、予期しなかった暴力や弾圧にどうやって対処したか、また日常的な監視と経済的な困窮のなかでどうやって生き抜いてきたかなど熱を帯びてくる。初期の*Tutur Perempuan*との違いで言えば、被害者たちが何を望んでいるのか、とくにどのような形で正義が実現されることを希望しているか、またそのための集団的な取り組みをどう進めるべきかについて語ってもらうように私たちが積極的に働きかけたということである。

それぞれの地域の女性運動の政治的な伝統や作風、また経験した国家や社会からの監視の度合いなどの違いによって、毎回の集まりはそれぞれ特徴をもったものとなった。山間の村、アルゴサリはかつて男性囚人の強制労働所だったところで、ここの女性たちは1970年代からこのコミュニティーに閉

---

18 人権団体と被害者グループからの声に押されて、政府は2000年以前に行われた人権侵害事例を解決するための*Komisi Kebenaran dan Rekonsiliasi*, KKR（真実和解委員会）の設立に同意した。人権活動家および被害者の一部は、この真実和解委員会は政府が加害者に恩赦を与え、不処罰の連鎖を生み出す完璧な機能となってしまうと指摘するものもいる。こうした人々は特別人権法廷の開催が被害者に正義を実現するためにより効果的に機能すると主張している。真実和解委員会設立の法案は2004年9月に可決されたが、いまに至るまで大統領は司法人権省の下にある選出委員会が提示した候補者から委員を最終確定する作業を行っていない。ここで重要なのはこの法律には性的暴力への対応などジェンダー的な条文は存在しておらず、諸人権団体がノミネートした女性候補者はすべて選出委員会によって却下されているという事実である。そのなかには著名なフェミニスト活動家で現在、女性への暴力防止国家委員会の監視活動班委員を務めているイタ・F・ナディア（Ita F. Nadia）も含まれている。

じ込められて生活してきた[19]。彼女たちは外界との接触をほとんど持っていない。だから「ジャカルタからの来訪者」を迎えて集まりをもつことをとても喜んだ。獄中経験をもつ数名以外は70代の高齢の女性たちで、もともとジャワから夫に連れ添ってこの村にやってきた人たちだった。この女性たちは自分の経験を語ることになんの抵抗もなく、むしろぜひ自分の話を記録して「外の世界の人たちに私たちの経験を知らせてほしい」と望んだ。彼女たちはあまりにも長く隔絶した生活を送っており、そのため彼女たちが望む「正義」とは、いわゆる人権団体がいうような加害者の懲罰といったものではなく、自分たちの存在がしっかりと認知され余生をよりよい状態で過ごしたいというものだった。

バリの被害女性たちはまた同じく胸が張り裂けるような孤立を経験していた。彼女たちはもう30年以上にもわたって、仲間だった被害者たちが自分たちの生活圏の外でどんな生活をしているのかまったく知らず、1965年事件の政治的性格と規模についてもまったく知らなかった。彼女たちはなんとか暴力的な混乱状況を生き延び、自分の人生が滅茶苦茶になってしまったことに耐えてきた。そのとき助けになったのはカルマ思想に基づく悪報というヒンズー教の教えだった。1965年末にアカ狩りがはじまったとき、彼女たちのほとんどはゲルワニやPKIのメンバーではなく、またPKIに関係する大衆団体にも属してはいなかった。比較的若い人たちはPKIやその青年組織の様々活動、例えば大規模な集会でのアート・パフォーマンスやマーチング・バンド、コーラスなどに参加していたが、その他の多くは活動家の妻として伝統的な役割を負って夫の政治活動を支えていた。そしてある夜、突然大切にしてきたものすべてを失った。「私が何をしたというの？」という問う彼女たちに、返ってきたのは「ゲルワニ」あるいは「*barak*（バリ語でアカ＝共産主義者の意）」という烙印だけであり、これによって暴力と「市民」社会からの追放が正当化された[20]。そんな彼女たちにとってみれば、私たちの集まりは単なる心に閉ざされた悲しみのはけ口であるばかりではなく、他の場所で行われた様々な暴力について知る機会でもあった。ある女性がブル島に送られた自分の夫の話をしたときには他の女性たちは大変な衝撃を受けていた。彼女たちはそれまで自分たちの場所以外に多くの収容所があることを知らなかったのである。

アルゴサリとバリの被害女性たちと同じように、ソロ周辺の被害女性たちも普段お互いに顔を合わせることはなかった。だがここでは被害女性たちが深刻な孤立状況に置かれたわけではなかった。ひとつには彼女たちの多くがかつていくつかの収容所やプラントゥンガンの女性の強制労働所で一緒に過ごしていたということがある。ただし釈放された後、彼女たちが会うことは二度となかった。またソロでは被害者団体の活動が他地域とくらべてもっともよく組織されており、全国的な政治状況に関しても活発に情報を収集し広めているということがある。バリでは反共虐殺のなかで著名な左翼の政治家や活動家が州議会議員から村々のレベルに至るまで殺されてしまったのに対して[21]、ソロでは中

---

19 国軍は東カリマンタンの各地の拘置所から約300人の囚人をこの地に移住させた。その際、各自に住居と2.25ヘクタールの土地が与えられるという約束がなされた。だが待っていたのは巨大な樹木が生い茂る深い森だった。国軍はこの樹木を伐採し鉄道の枕木などとして使う高品質の木材として売却するために囚人の労働力を必要としたのである。囚人たちはなんらの賃金をも得ず、強制労働に耐えられないほどの栄養価しかないわずかな食事を与えられたのみだった。

20 レスリー・ドワイヤー（Leslie Dwyer）はバリの被害女性たちのすさまじい経験に関して鋭い分析を与えている。"The Intimacy of Terror: Gender and Violence of 1965-66 in Bali", *Intersections: Gender, History and Culture in the Asian Context*, Issue 10, August 2004.

21 国軍による反共襲撃とバリでのその壮絶な影響に関しては次の論文がすばらしい分析を与えている。Geoffrey Robinson, *The Dark Side of Paradise: Political Violence in Bali*, Ithaca: Cornell University Press, 1995 and Leslie Dwyer and Degung Santikarma, "When the World turned to chaos: 1965 and its aftermath in Bali, Indonesia", in *The Spectre of Genocide: Mass Murder in Historical Perspective*, edited by Robert Gellately and Ben Kiernan, Cambridge: Cambridge University Press, 2003.

堅幹部が生き延び、その後の被害者の取り組みの比較的強固な基盤となったのである。ソロの被害女性たちが*Tutur Perempuan*を互いの再会と友情の更新の場として活用することができたのは、この男性中心の被害者団体からの無条件の支援があってのことである。こうして彼女たちは自らが直接に経験した出来事と新聞の見出しをかざったあの事件とのつながりをやっと知ることができた。

ソロでは様々な領域での取り組みが目覚しく進んだ。女性たちが語りを行うためのスペース作り、女性史を再構築する活動、社会的なネットワークの断絶状況を回復するための取り組み。こうした取り組みのなかで支援と理論の間に相互関係が生まれた。被害女性たちの語りは個人の人生、さらには家族関係にまで大きな影響を与えた国家暴力の性格と深さを明らかにする大きな力を持っている。私たちはその語りを新しい歴史記録として書き記すわけだが、被害者を単なる情報と記録の収蔵庫として扱うわけにはいかない。小さな独居房への幽閉、投げつけられた悪罵の数々、でっち上げられた罪、偽証への誘導、やってもいない犯罪を赦免にしてやるという甘言など彼女たちは語ることもできないほどの暴力を経験している。ソロのある被害者は次のように語った。「あの恐ろしい時代のことをやっと話すことでできてほっとした。頭のなかで凍りついた塊をやっと溶かすことができたよ」私たちが人権活動家あるいは歴史家として真実を知ろうとするとき、いつも次の言葉に直面してきた。「どうして私が被害者になったんだ」「私がなにか悪いことをしたのか」。

なぜ自分たちがこんな目にあったのか合理的に説明してほしいという気持ちとともに、もうひとつ女性たちが強く求めることがある。多くの男性被害者たちとは違い彼女たちは壮大な語り、つまり1965年の独立に向かう反植民地闘争のなかで英雄あるいは悪党として語られてきた人々の評価を逆転させる、といったようなことにはそれほど関心をもたない。彼女たちが強い関心を寄せるのは、「女性共産主義者」を不道徳で野蛮なものとして描き出し、共産主義者の疑いのあるものを（スハルトが言ったように）「根絶やし」にすることを正当化させてきた性的なフィクションである。この明らかな嘘が、彼女たちとその子ども、孫との関係に大きな影響を与えてきた。つまり彼女たちは子や孫に対して自分は本当に良い母だったのだと常に示さねばならないのであり、そうしてスハルト体制による極めて保守的な母性思想に屈服せねばならなかったのである。彼女たちにとって、社会から冷たくあしらわれたり公然と非難されることには耐えられたとしても、自分の子どもに誤解されたり拒絶されることはいわば無限の苦しみであった。さらに胸を打つのは、彼女たちの関心が子どもに孝行してほしいという個人的な欲望よりも、女性の歴史に尊厳を取り戻そうということに置かれていることである。たとえばソロの女性たちは繰り返し次のように問う。「どうやったら自分の子どもたちが自分の歴史を継いでくれる、つまり歴史によって生まれた子どもになってくるだろうか」と。

男性も女性もふくめて若い活動家たちがいたことが、*Tutur Perempuan*の場にいる被害女性たちにある種の解放感を与えた。それは社会のなかに自分の話に興味を持ち、それを重要だと考える人がついに現れたという感覚である。さらに彼女たちにとって若者との新しい友情はさらに多くの人々に自分の話を届けるための架け橋のように思えた。被害女性たちは国家が過去の過ちを認めることが、自分たちの名誉と市民としての地位を回復するために死活的に重要だということを知っていたが、同時に1965年に何がおこったのかということを社会の全体が理解することが重要であると感じていた。彼女たちは様々な方法を使って、女性団体やその他の人権侵害被害者たちと建設的に対話する可能性を探った。驚くべきことに虐殺された将軍の娘たちとの対話までもが模索された。「彼女たちに言いたい。私たちはあなたのお父さんを虐待したり殺したりしていない、と。そんな計画があったことさえ知らなかったのだから」

ソロで最後の*Tutur Perempuan*が開かれたのは1965年事件40周年を記念してのことだった。男女

双方の被害者たち、またその子どもたちが計画段階から実際の取り組みにいたるまで積極的に参加したことで、集まりは素晴らしいかたちで実現しその意義もより深いものとなった。中部ジャワから100人以上の女性が二日間の会合に出席し、それぞれが過去の記憶と未来に向けた希望を語った。全体会とグループ討論が行われ、会合は参加者とくに昔活動家だった女性たちに、かつて自分たちが開いた女性の政治集会を思いおこさせた。夕食が終わると女性たちは踊ったり昔のラブソングや愛国歌を歌ったり、詩を読んだりして楽しい時を過ごした。最終日にはこのような会合をそれぞれの町でも持つことを確認し、そして近い将来の再会を約束して取り組みを終えた。

*Tutur Perempuan*では私たちはいつも注意深く記録をとり、テープやビデオへの録音・録画を行う。そして取り組み終了後、報告書にまとめ参加者に配布する。こうした取り組みを通して私たちは1965年事件の被害女性の声を社会に広げたいという願いを共有する他のグループとも接触をすすめた。2005年6月からはKomnas Perempuan（女性への暴力防止のための国家委員会）および最大のイスラム教組織Nahdlatul Ulama　(NU）傘下の青年組織Syarikat Indonesiaとの間で毎月討議を行っている。この二組織は1999年以来、故Ibu Sulamiとともに草の根にいる被害者の家族と加害容疑者の間に和解を実現するという課題に取り組んでいる[22]。この討議のなかで私たちは被害者からの提案や要求に応えていくためにそれぞれのグループ間で取り組みを分担していく必要があるということを確認してきた。その地位と影響力からしてKomnas Perempuanは、ゲルワニと1965年事件の被害女性に対して国家が大規模に広めてきた歴史叙述に対抗して、被害者への支援を集める社会環境を整えることが中心的課題である。またSyarikatは和解の可能性を探るために*Tutur Perempuan*に類似した様々な集まりを持っている。また私たちのグループは被害女性の語りに立脚した歴史の再構築という課題に取り組む。今年またさらにたくさんの小さな集まりを各地でもち、少なくとも３ヶ所で州規模の会合を開催して取り組み状況のフォローアップを行いたい。すべてがうまく行けば、被害女性たちが多くの聴衆を前にそれぞれの事例について語るKomnas Perempuan主催の全国規模の公式会合が開かれることになるだろう。

【日本語訳　河合大輔】

[22] NUの青年民兵組織、BanserとAnsorは国軍に支持されながら、とくに中部および東部ジャワでの大虐殺に参加している。彼らは共産主義者は無神論者であり、敬虔なイスラム教徒を皆殺しにしようとしているというでたらめな理由でみずからの虐殺への参加を正当化した。故イブ・スラミはNU内の若く先進的な活動家に接触し、和解を提案したおそらく最初の被害当事者だった。